地域発展へ大学生ら汗

県外から参加 地元住民と協力

宇和島市三間地域の里山の暮らしの活性化につなげようと、県外の大学生らと地元住民の約60人が22～25日、ワークショップなどのプログラムに取り組んだ。古民家を活用した新たな拠点づくりやJR予土線をテーマにしたシンポジウムを通じ、地域の将来を共に考え汗をかいた。

宇和島・三間地域 古民家や予土線 活用探る

地元住民らでつくるNPO「MIMA森プロジェクト」が初めて企画。主に西南四国の活性化事業に携わる浜田企画事務所（高知県四万十市）のコーディネートで名城大や阜稲田大をはじめ、北宇和高校三間分校や宇和島東高校の学生・生徒らが参加した。

一部の学生は、同NPO代表の岡本裕之さん(54)方の古民家＝宇和島市三間町迫目＝で寝泊まりしながら活動。三間分校の生徒らが集う拠点として築150年以上の長屋門の改修作業に着手したほか、近くの竹林整備の一環で切り出した竹で、秋に開くイベントで使う竹灯籠を作った。

協力して竹灯籠作りに取り組む参加者

24日は参加した地元の小中学生が、大学生や八幡浜工業高校の教員に教わり竹に巻き付けた紙に描いたデザインに合わせてドリルで穴を開けた。同校2年の中井劉誠さん(16)は「ものづくりが好きで、活動は楽しい」と話し、三間中学校3年の白崎大和さん(14)は「いろんな人が力を合わせて三間を発展させようとしてくれてうれしい」と歓迎していた。

別の会場で実施した予土線のシンポジウムでは、沿線の高校生による利用促進に向けた活動や、大学生から見た魅力についての発表などがあった。

岡本さんは「次代へバトンタッチできるよう、にぎわいの場をつくりたい」と意気込んでいた。（阪和舞）

愛媛新聞　令和６年８月２９日（木）付　９面
掲載許可番号 d20240829-02